

平成 22 年 5 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：194020210  
研究課題名（和文） シエラレオネ共和国都市部の精神保健状況に関する複合科学的な研究  
研究課題名（英文） A Multi-disciplinary Study on Mental Health Issues in Urban Sierra Leone  
研究代表者  
落合 雄彦（OCHIAI TAKEHIKO）  
龍谷大学 法学部 教授  
研究者番号：30296305

研究代表者の専門分野：アフリカ地域研究  
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究（アフリカ）  
キーワード：シエラレオネ、精神保健、精神医療、薬物依存

#### 1. 研究計画の概要

(1) 西アフリカの小国シエラレオネでは、1991 年から 2002 年にかけて激しい内戦が展開された。そして、その過程のなかで、少年たちがゲリラに誘拐されて児童兵にさせられたり、少女たちがゲリラ兵の「妻」として事実上の性的虐待を受けたりするなどの深刻な人権侵害状況が広範にみられた。また、ゲリラ兵が一般市民の四肢を切断するという衝撃的で残虐な暴力行為が繰り返された。さらに、マリファナ、ヘロイン、コカインなどの薬物が戦闘員や若者の間で広く使用された。こうした内戦下での暴力や薬物使用は、児童をはじめとする様々な社会階層の人々に身体的な傷や障害はもちろん、トラウマ、心的外傷後ストレス障害（PTSD）、神経症といった多くの心の問題を残した。そして、紛争後の今日、戦闘員と非戦闘員にかかわりなく、その心のケアが精神保健上のひとつの重要な課題となっている。

(2) ところが、紛争後のシエラレオネでは、紛争前よりも精神保健サービスに対するニーズが一層高まっているにもかかわらず、従来からみられたわずかばかりの精神保健関連施設は内戦によって大きな被害を受けており、同国唯一の公立精神科病院が運営を再開したとはいえ、いまだかなり限定的なサービスを提供しているにすぎない。

(3) 本研究の目的は、精神保健サービスの必要がこれまで以上に高まりつつあるにもか

かわらず、その提供が極めて限定的な状況にある紛争後のシエラレオネに注目し、地域研究的な視点から、特に同国都市部の精神保健の現状とそのサービス向上のあり方に関する複合科学的な基礎調査を実施することにある。

(4) 具体的には、本研究では、首都フリータウンといったシエラレオネ都市部に焦点を絞り、同国に現存する唯一の精神医療機関である「シエラレオネ精神科病院」（Sierra Leone Psychiatric Hospital）と、やはり同国のほぼ唯一の民間精神保健リハビリテーション施設である「シティ・オブ・レスト」（The City of Rest）の 2 つの施設を調査拠点にしなから、精神保健をめぐる以下の諸項目の実状について明らかにする。

- 1) 精神保健の「サービス提供者」（シエラレオネ精神科病院、シティ・オブ・レスト）の現状とニーズ
- 2) 精神保健の「当事者」（入院患者、外来患者、施設入所者、薬物依存症者など）の現状とニーズ
- 3) 精神保健の「家族」の現状とニーズ
- 4) 薬物（マリファナ、ヘロイン、コカインなど）の流通・規制・汚染状況
- 5) 精神保健関連の法制度とプライマリ・ヘルス・ケアの取り組み
- 6) 精神医療従事者の養成体制と向精神薬の種類・流通・価格
- 7) 伝統的治療者の実践活動

#### 2. 研究の進捗状況

(1) 2007 年度については、まず 7 月にイギリスに出張し、植民地期シエラレオネの精神保

健に関する史料を収集した。また、8月から9月にかけてシエラレオネで最初の現地調査を実施し、フリータウンにあるシエラレオネ精神科病院とシティ・オブ・レストの2つの施設を調査拠点にしながら、同国都市部の精神保健状況に関する聞き取り調査および資料・データ収集を行った。また、シエラレオネ大学関係者の協力をえて、精神疾患の治療実践を専門とする伝統的治療者に対する聞き取り調査も実施した。さらに年度後半には、収集した情報やデータの整理・分析を実施した。

(2) 2008年度については、8月から9月にかけてシエラレオネで現地調査を再度実施し、シエラレオネ精神科病院とシティ・オブ・レストを調査拠点にしながら、同国都市部の精神保健状況に関する聞き取り調査およびデータ収集を行った。また、カトリック系団体の「ファティマ・インスティテュート」(Fatima Institute)がシエラレオネ北部の都市マケニに近年開設した精神科クリニックを訪問し、同クリニックにおける治療および支援活動に関する情報を収集した。さらに2009年2月から3月にかけて再びシエラレオネを訪問し、前述した3つの精神保健関連機関においてフォローアップのための現地調査を実施した。

(3) 2009年度については、9月にシエラレオネで現地調査を実施し、精神保健状況に関する聞き取り調査およびデータ収集を継続実施した。また、2010年2月から3月にかけて再度シエラレオネを訪問し、フォローアップのための調査を行った。

### 3. 現在までの達成度

研究のための「インプット」(情報・データの収集)については、ほぼ当初の計画どおりに進展している。

(理由)

上述のとおり、過去3年間にイギリスでの植民地期史料収集のための調査を1回、シエラレオネでの資料収集・聞き取り調査を計5回実施してきた。この結果、当初計画していた7つの具体的な調査項目 1)サービス提供者、2)当事者、3)家族、4)薬物、5)精神保健制度とプライマリ・ヘルス・ケア、6)医療従事者育成制度と向精神薬流通、7)伝統的治療者のほぼすべてに関して相当程度の情報・データ収集をすることができた。特に、当事者については、シティ・オブ・レストにおいて30名程度を対象にして質的および量的な調査を実施し、精神障害者や薬物依存者のライフヒストリーの詳細な聞き取りなどを行うことができた。

研究の「アウトプット」については、その進捗に若干の遅滞がみられる。

(理由)

他方、現地調査などによる資料・データの収集といった、研究のための「インプット」ではなく、そこでえられた情報・データをもとに研究成果を公表していく「アウトプット」のプロセスについては、当初の見込みよりも若干の遅滞がみられた。研究代表者・分担者は、これまで毎年のように論文や図書を発表してきたものの、諸般の事情により学会での口頭発表はまだ実施できていない。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 研究の「インプット」に関しては、最終年度となる2010年度についても、これまでと同様に継続実施していきたい。

(2) 他方、研究の「アウトプット」がこれまで若干遅滞してきたことを考慮し、今後は最終報告書の作成、さらなる論文・図書の執筆と公表、学会における口頭発表などをより一層精力的に実施したい。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

! 落合雄彦「分枝国家シエラレオネにおける地方行政 植民地期の史的展開」、『アフリカ研究』第71号、119-127頁、2008年、査読有。

! 落合雄彦・金田知子「植民地期シエラレオネにおける狂気の歴史」、『龍谷法学』第41巻第3号、111-130頁、2008年、査読無。

! 落合雄彦「西アフリカを襲う国際的な麻薬密輸の脅威」、『エコノミスト』第87巻第36号、48-51頁、2009年、査読無。

! 金田知子「シエラレオネにおけるメンタルヘルスケア」、『社会科学研究年報』第40号、掲載頁未定、2010年(公刊予定)、査読無。

[図書](計2件)

北川精一・久保美紀共編『社会福祉の支援活動 ソーシャルワーク入門』ミネルヴァ書房、2008年(分担執筆者：金田知子)

落合雄彦編『アフリカの紛争解決と平和構築 シエラレオネの経験』(仮題)、昭和堂、2011年(公刊予定)。

[その他]

ホームページ

<http://hare.law.ryukoku.ac.jp/~ochiai/kaiken-SL.htm>